

「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」を読んで
「教学要綱」の不正、単法本尊と同じです！

2025年9月24日

創価高校・大学4期 図斉修
(以下、**赤字**、**青字**、下線は図斉によります)



8月24日、池田先生の入信記念日に、池田大作先生監修「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」が発刊されました。連日、聖教新聞に広告され、私は購入、一気に読みました。そして落胆しました。「教学要綱」と同じ単法本尊、即ち、日蓮大聖人を人本尊とは認めない記述であり、戸田・池田両先生の本当のご指導を無視した記述だからです。

この度も、日蓮仏法の本義、三代会長の正義を厳護すべく、池田門下生の使命、責務から「教学要綱」と「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」の不正を記します。以下、両書の記述を掲示、次に、戸田・池田両先生の本当のご教示と、ご指導を明示します。

「教学要綱」67頁には、次のように記されています。―

「妙法蓮華經」に関して、「**四信五品抄**」には、妙樂大師による『法華文句記』の「**略して經題を挙ぐるに、玄に一部を収む**」という言葉を引きかれ、經題には『法華經』一部、すなわち一經の全体が収まっていることを示されている。その上で、「**妙法蓮華經の五字は、經文にあらず、その義にあらず、ただ一部の意なるのみ。初心の行者、その心を知らざれども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当たるなり**」(御書二六九頁)と述べられている。ここでは、「妙法蓮華經」は、文字として表された言葉の次元や、その言葉によって表現された内容にとどまるものではなく、『法華經』一經全体が伝えようとするものであるとされている。そして、初めて信仰に入った者であっても、「南無妙法蓮華經」を唱えるという実践によって、仏の覚りの境地を内面に体得できるとされているのである。―と。

そして、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」85, 86頁には次のように記されています。

第6段 題目に森羅万象が収まる

題目の南無妙法蓮華經に、森羅万象（万法）が収まっていることを示し、信心口唱によって法華經の本意を会得できることが明かされる。

第7段 理解せず題目を唱えただけで功德が

題目には全ての教えが含まれていることを章安大師(灘嘶)や妙樂大師の言葉を挙げて明かされ、理解はなくても信じて実践する人にはその功德がそなわることを示される。一と。

上記に対し、戸田先生の**四信五品抄講義**（戸田城聖全集第7巻356，357頁）には、には次のように記されています。一

四信というのは、信心の段階を四つに分けたものである。五品というのは、修行の方法、位に五つあるということです。いずれにしても、大聖人の仏法の場合、根本とすべき修行は、御本尊様に題目を唱えるのが、いちばん肝心要のことなんだよということです。（中略）

寿量品というのはわれわれが朝晩あげておりますが、仏の長遠の生命を説いており、その**寿量品の文底に南無妙法蓮華經がある**。（中略）**文底になると「仏の寿命の長遠を聞いて」とは、御本尊様に会えてというように、末法今日では読まなければならないことになるのです。**（中略）

御本尊様を拝んで、わけがわかって、わからなくても、とにかくそれを信ずる、それが最初の信心の姿だということです。その功德というものは限りがないということです。一と。

また、（同386頁）には、次のように記されています。一

大御本尊の両脇におしたためになられておりますが、妙樂がいわく「**若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有る者は福十号に過ぐ**」と。十号とは仏のことです。この仏は、釈迦仏法の仏です。大聖人の御本尊様の意味ではないのです。われわれがよく仏様だ仏様だと聞いているあの仏様に勝る（罰も功德も）こと、たいへんなものだという一と。

（私見）上記、戸田先生の四信五品抄講義でのご指導は、文底から御本尊を拝することの重要さをご指導され、さらに、日蓮勝・釈迦劣が明快に述べられているのです！

そして、これは以下の主旨になるのです。－

文上の法華経は、本尊問答抄等に説かれるように法勝人劣だが、大聖人を供養する功德は釈迦を供養する功德よりも遥かに勝るので、文底の法華経においては、法と仏にこのような差別はなく、従って「**此の（南無妙法蓮華経）中には已に如来の全身有す**」本尊問答抄、とあり、この如来こそが大聖人ということになり、常に法と一体の根本仏ということになるのです。

従って、経王殿御返事の「**日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし**」ということになるのです。どれほど、戸田先生のご指導が偉大であるか、その反対に、「教学要綱」で引用、解説された四信五品抄の意味がいかにか文上であり、御本尊様の偉大さと尊さを蔑ろにした偏見であるか、この戸田先生のご指導から判明するのです！

そして、池田先生の巻頭言・講義集第1巻（1962年）、**四信五品抄講義**（201～202頁）には、次のように記されています。－

われわれ学会員が、たとえ少しの理解もなく南無妙法蓮華経と題目を唱える、その位は、どういう位であるか。日蓮大聖人がはっきり明かしてくださっている。（中略） 仏法を究明してみれば、ぜんぶ**一大秘法の南無妙法蓮華経、すなわち、御本尊様に帰一すること**は、当然なことです。その御本尊様をたもった者の位はどうか。これを明かしていらっしゃるわけです。－と。

（私見）上記、戸田・池田先生の**四信五品抄講義**についての本当のご指導は、文底からであり、南無妙法蓮華経を唱えるとは、結論、**一大秘法の南無妙法蓮華経、すなわち、御本尊様に帰一すること**なのです！この、戸田・池田両先生のご指導に対し、「教学要綱」と「現代語訳 四信五品抄」の記述は御本尊について記さず、題目の「南無妙法蓮華経」だけを偏重した邪義なのです。

そして、「教学要綱」158頁には、「法宝」について、以下、記述です。－
創価学会は、大聖人が覚知し説き示された一大秘法である「南無妙法蓮華經」を法宝として尊崇し、大聖人が顕された「南無妙法蓮華經」の御本尊を拝して、「南無妙法蓮華經」の題目を唱えるのである。－と。

これこそが、池田先生のご指導「一大秘法は御本尊」「法宝は南無妙法蓮華經の御本尊」に対して、完全に違背した「教学要綱」の最悪の邪義なのです！

次に、本尊問答抄については、「教学要綱」80～81頁には、下記、記されています。－

『法華經』の題目を本尊とする理由として、「法華經は釈尊の父母、諸仏の眼目なり。釈迦・大日、総じて十方の諸仏は、法華經より出生し給えり。故に今、能生をもって本尊とするなり」(三〇四頁)と述べられている。釈尊をはじめとして、あらゆる仏は『法華經』によって仏となったのであるから、「所生(生み出されるもの)」である釈尊などの仏を本尊とするのではなく、「能生(生み出す主体)」である『法華經』の題目、すなわち「南無妙法蓮華經」を本尊とすることを、明確に示されているのである。－と。

そして、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」177頁には次のように記されています。－

「報恩抄」では「本門の教主釈尊を本尊とすべし」(新二六一頁・全三二八頁)と述べられている。(中略)浄願房は「報恩抄」を受け取ったのであるが、そこに記された本門の教主である釈尊を本尊とするという教えと、実際に頂いた法華經の題目を中心とする文字曼荼羅の御本尊とが、どのように結びつくのかという疑問を抱いても不思議ではない。本抄では、そのような疑問に答えるべく、問答が重ねられていくのである。

この疑問に対する答えとしては、「法華經の題目を本尊とするのがよい」「釈迦仏や大日如来、広く言えば十方世界の仏たちは、法華經からお生まれになったのである。それ故、今、仏を生み出す根源(能生)を本尊とするのである」と示される－と。



上記、「教学要綱」と、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」に対して、池田先生が監修された「本尊問答抄に学ぶ」(中) 大阪・豊中総合本部青年部編(1990年)の173～174頁には、以下記されています。一本抄で示された「法華經の題目」とは、事の一念三千の南無妙法蓮華經であり、久遠元初の自受用身の当体がそのまま一念三千の南無妙法蓮華經であることを示されている(人即法)。また報恩抄における「本門の教主釈尊」との仰せは、久遠元初自受用身の御事であり、事の一念三千が即自受用身であることを顕されたものである(法即人)。以上のことから、両抄における本尊の御教示は、その元意においてはいずれも大聖人御図頭の人法一箇の大曼荼羅本尊を明かされたものと拝されるのであると。



さらに、「本尊問答抄に学ぶ」(下) 大阪・豊中総合本部青年部編(1991年)の12～16頁にも、以下記されています。—
「問うて云わく、末代惡世の凡夫は何物をもって本尊と定むべきや。答えて云わく、法華經の題目をもって本尊とすべし」(御書302頁)について、次のように記されています。—

【講義】 法華經の題目 本段は本抄の標文であり、全体の主題を示されているところである。以下、この主題をめぐって論を展開され、末代惡世の凡夫が「法華經の題目」を本尊とすべき所以を明らかにされていく。この標文においては、末法の本尊をまず法の辺から示されているが、その元意は人法一箇の本尊であり、人に即する法の本尊であることに注意しなければならない。また、「法華經の題目」は、単に二十八品の經題ではなく、元意の辺から拝さなくては本抄全体の主旨を誤ってしまうことになる。(中略)

「法華經の題目を以て本尊とすべし」との仰せから、日蓮宗諸派では“大聖人の仏法においては題目が根本であり、それを唱える信心の対象として本尊があるとしてきた。これは本尊と題目の関係を誤って捉えた本末転倒の考え方であり、本尊を輕視し、根本の本尊に迷つてきたのである。法華經の題目は法華經の題号とその名は同じであるとはいえ、義は全く別である事を知らねばならない。—と。

そして、池田先生の「日蓮大聖人御書十大部講義第五卷 報恩抄」390頁には、以下、記されています。

報 恩 抄

細井日蓮監修
池田大作著
日蓮大聖人御書十部講義
第五卷

—「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とある。これは人本尊を示されたものである。教主釈尊には多くの義があり、藏教、通教、別教、法華經の迹門、本門、文底のそれぞれに教主釈尊がある。いまここにおおせの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち、久遠元初の自受用身であらせられ、末法に日蓮大聖人と御出現の教主であらせられるのである。色相莊嚴の在世の釈尊は、法勝人劣であるが、久遠名字の教主釈尊は、人法一箇であらせられる。ゆえに本尊となすところの教主釈尊とはまた、事行の一念三千の大曼荼羅であらせられるのである—と。

（私見）「法華經の題目」とは人法一箇の日蓮大聖人のことなのです。この真義を無視しているのが「教学要綱」であり、80～81頁の記述は池田先生のご指導を完全に無視した邪義なのです。そして、上記、戸田・池田両先生の本当のご指導により、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」も邪義なのです。よって、両書は、即刻、絶版にすべきです！

「教学要綱」と「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」の底意は、まさに、単法本尊であり、その文は、日蓮大聖人の御本尊に唱題をするとの根本義を欠き、どんな本尊だろうと南無妙法蓮華經と唱えても構わない、さらには、本尊は何でもいいとの拡大解釈の余地さえ残す暴論になっています。これこそが、「教学要綱」と「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」が持つ底意—日蓮本仏論と人法一箇の否定—からの邪義なのだと考えます。

池田先生は次のようにご指導です。—「この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊であります、再往は人法一箇の御本尊であります。ゆえに「南無妙法蓮華經 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華經は”法”、日蓮在御判は”人”をあらわすのであります」（『池田大作全集』第24巻 観心本尊抄講義 p. 232）、これが、日蓮仏法の真髓、結論なのです。

以上で、私の拙文を終わります。この拙文にご賛同の方は、どうぞ、親しきご友人にこの拙文をご紹介下さい。そして、私の下記アドレスへ、忌憚なきご意見、ご指導を頂きたい思います。kiiroibara.526@gmail.com 敬具 図斉修